

万葉集卷十七冒頭部歌群攷

村 瀬 憲 夫

一

万葉集の卷十七と卷二十は、大伴家持の「歌日誌」の性格を有する。そしてその「歌日誌」は天平十八年から始まる。ところが、卷十七の冒頭部には、少数ながら天平十八年以前の歌が収められている。本稿ではこの歌群を「卷十七冒頭部歌群」と呼ぶことにする。それは次のような歌である（歌一首一首の掲載は略して、題詞・左注のみを記す。左注は「」で括る）。

A 天平二年庚午冬十一月、大宰帥大伴卿被_レ任_ニ大納言_兼帥、上_レ京之時、儻從等別取_ニ海路_一入_レ京。於_レ是悲_ニ傷_ニ羈_ニ旅、各陳_ニ所_レ心_一作歌十首（17・三八九〇～三八九九）

〔右一首、三野連石守作〕

〔右九首、作者不_レ審_ニ姓名_一〕

B 十年七月七日之夜、独仰_ニ天漢_一、聊述_レ懷一首（17・三九〇〇）

〔右一首、大伴宿祢家持作〕

C 追_ニ和_ニ大宰之時梅花_一新歌六首（17・三九〇一～三九〇六）

〔右、十二年十二月九日、大伴宿祢書持作〕

D 讚_ニ三香原新都_一歌一首并短歌（17・三九〇七～三九〇八）

〔右、天平十三年二月、右馬頭境部宿祢老麻呂作也〕

E 詠_ニ霍公鳥_一歌二首（17・三九〇九～三九一〇）

〔右、四月二日、大伴宿祢書持從_ニ奈良宅_一贈_ニ兄家持_一。〕

F 橙橋初咲、霍公鳥翻嚶。対_レ此時候_一、詎不_レ暢_レ志。

因作_三首短歌_一、以散_二鬱結之緒_一耳。(17・三九一
〜三九二)

(右、四月三日、内舎人大伴宿祢家持從_二久邇京_一、
報_二送弟書持_一)

G 思_二霍公鳥_一歌一首 田口朝臣馬長作(17・三九一四)

(右、伝云、一時交遊集宴。此日此処、霍公鳥不_レ
喧。仍作_二件歌_一、以陳_二思慕之意_一。但其宴所并年
月、未得_二詳審_一也。)

H 山部宿祢明人詠_二春鷲_一歌一首(17・三九一五)

(右、年月所処、未得_二詳審_一。但隨_二聞之時_一、記_二
載於茲_一)

I 十六年四月五日、独居_二平城故宅_一作歌六首(17・三
九一六〜三九二一)

(右、大伴宿祢家持作。)

以上三十二首の、天平二年から天平十六年までの歌が
年次順に並べられているのである。これらの歌が、「家
持の手許に控えられていた歌稿」であり、この歌群の
「整理の主が家持」である、との伊藤博氏〔万葉集末四巻歌群
の構造と成立〕の指摘に疑いの余地はないと思われ、本稿で
もこれを前提とする。

さて、従来指摘されているように、巻一〜巻十六に

は、作歌年代の記された歌を規準にして言えば、天平十
六年までの作が収められている。従って、当巻十七冒頭
部歌群の歌々は、年代的に言えば、当然巻十六までの巻々
に収められてしかるべき歌なのである。そこで諸注釈書
はこの歌群について、「前々の巻の補遺〔万葉集(日本古)
典文学大系(四)〕」
「天平十八年以後の作を輯録するに当り、その以前の作
で、巻三、四、五などに漏れたものを、巻頭に収めた」
〔万葉集(日本古)
典文学大系(四)〕〕、「家持周辺の鶉助的作品」巻十六以前の諸巻
がひととおりまとまった後に補入したもの〔万葉集(日本古)
典文学大系(四)〕」
といった規定をしている。

確かに一首一首の歌は、諸家が指摘するように凡作が
多く、その意味で「鶉助的作品」という評も当たってい
ようし、またAとIの相互間にさしたる統一性がみられ
ない点からしても、「補遺」の感は免れない。しかしな
がら今一度子細に検討してみると、この歌群の歌の採録
には、家持の興味・関心、家持がどのような歌を重視し
たか等のことが、色濃く反映されているように思われ
る。つまり、この歌群は、補遺には違いないが、たまた
ま巻一〜十六の編纂に漏れていたものを機械的に集めた
というだけの、無意図的な歌の収集、として片付けてし
まうことの出来ない面を持っているようである。そこで
本稿ではその辺の問題について考えてみたいと思う。

二

この歌群の歌にはいくつかの特徴を指摘することが出来る。以下、その特徴を箇条的に挙げ、かつその特徴が、家持自身にも認められる特徴なのかどうか、若干の説明を加えたい。

特徴としてあげられる第一は、BとI（いずれも家持作）の題詞に「独」の語が記されていることである。家持は歌の中、或は題詞・左注に「ひとり」の語を多用している、家持の作品にとって「ひとり」が極めて重要な意味を持っていることは、川口常孝氏（「家持宛書」「独」の世と構造）の論に詳しい。また中川幸廣氏（「天平十六年四月五日独」48・5）の論に詳しい。また「万葉集を学ぶ」53・12は「家持の歌の水脈にはひとり、居ることの悲しみが流れつづけている。だからそれは、家持の本質的な、資性による感情であったといえるだろう。」という風に述べておられる。

当面のBIは、表面上は、七夕の夜、「独」で天漢を仰いでいた、また、「独」で平城の故宅にいたという意味で記されているに過ぎないものの、家持の心の中では、もう少し深いものに根ざした「独」であったようである。すなわちBについては、伊藤博氏（論）「国歌の構造」大伴家持小は、この日宮廷で壮大に行われていた七夕の宴に、内舎

人家持は参加の資格を与えられていなかった、という背景を頭において読むべきであるとして『独仰天漢』には、宮廷の賜宴を想いつつ孤独に暮れている家持の姿がある」と述べておられる。またIについては、田辺爵氏（「大伴家持の孤独」「独唐平城故宅」の作の意）（味するもの）」「金城園文」14巻1号昭42・8）は、この時の家持の心境を、期待を寄せていた安積皇子の急逝による、「失意、衝撃、憂悶、孤独」ととる。つまりこの歌は「孤独感」と「憂鬱」の心情に根ざしていると説かれる。

BIの「独」をこのように理解するならば、これらの歌が、後年の家持の傑作

うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば（19・四一九二）

の心情に繋がっていくものであることは容易に理解出来る。この意味からしても、また家持が「独」を多用していることからしても、このBIは家持にとって大変重要な意味を含み持つ歌であったということが出来る。

冒頭部歌群の特徴の第二は、Fの題詞に「因作三首短歌、以散鬱結之緒耳。」とあり、この時既に家持が、歌を詠むことによって鬱結した心を晴らすという考えを述べていることである。歌（詩）に対するこのような考え方は、中国の詩論、山上憶良の歌論に既にみえ、家持もそれらに影響を受けての発言であるが、このこ

とは家持自身その後も繰返し述べている。すなわち「一看玉藻^一、稍写^二鬱結^一、二吟^三秀句^一、已蠲^二愁緒^一。非^三此眺^二翫^一、孰能暢^レ心乎。」(17・三九七六前文)、「入^レ京漸近悲情難^レ撥^レ述^レ懷^一一首」(17・四〇〇六題詞)、「於^レ是別^レ旧之懷、心中鬱結、拭^レ滯之袖、何以能^レ旱。因作^二悲歌^一二首^一、式遣^二莫忘之志^一。」(19・四二四八前文)、「春日遲々、鶴鷓正啼。悽惻之意、非^レ歌難^レ撓^レ耳。仍作^二此歌^一、式展^二締緒^一。」(19・四二九二左注)等である。このように、Fで述べられているような歌に対する考え方は、家持の歌論の中でも重要な位置を占めるものであったのである。

更によれば、家持にとって、前掲の「独」と、歌を歌うことによって「散^二鬱結之緒^一」ことは、密接な繋がりをもっているものようである。すなわち、先に触れた家持の最高傑作の「ひとりし思へば」の歌(19・四二九二)の左注に、「悽惻之意……式展^二締緒^一。」(前掲)の言が記されているのである。また17・三九六五番歌の題詞に「独」が述べられるが、その九日前の作である17・三九六二番歌の題詞に「仍作^二悲歌^一、以申^二悲緒^一」とあり、また五日後の作である17・三九七六番歌の前文に「一看^二玉藻^一、稍写^二鬱結^一、……非^三此眺^二翫^一、孰能暢^レ心乎。」(前掲)とあり、両者が相関連したものであったことが、このような現象面からでも言うことが出来る。

以上のように、冒頭部歌群中の家持の作(BFI)全てが、家持の作品・歌論におけるキーワードと深くかわりをもっているというのは、注目すべきことである。冒頭部歌群の特徴としてあげられる第三は、霍公鳥を詠んだ歌が多いということである。EFGIがそれにあたる。家持が霍公鳥を歌に好み詠んだことは周知の事実であり、川口常孝氏(「家持のあはれ」^中の一の事例^一)の調査によれば、万葉集中の霍公鳥を詠んだ作品一五六首の内、実に六四首は家持の作なのである。

冒頭部歌群の特徴の第四は、追和歌がとりあげられているということである。Cの書持の作がそれである。追和(追同)歌は、単に後に和したというだけのものではなく、一種の創作的文学形式であったのであり、万葉集では大伴郎女をめぐる歌に始まり、旅人・憶良の筑紫歌壇において最も盛んに行われ、それが大伴家持、書持、池主に引継がれていっているのである(拙稿「山上憶良」^一、^二人文科学第二五集昭51・3^一)。万葉集の全用例十五例のうち、五例は家持の作であり、追和歌に対して家持は強い関心を懐いていたことがわかるのである。

冒頭部歌群の特徴の第五は、書持の作が多いということである。CEがそれであり、Fも書持の作に答えたものである。万葉集中の書持の作品十二首のうちの八首も

が、この冒頭部歌群にあることを思えば、書持の作品の多さをこの歌群の特徴のひとつとしてあげることが出来る。家持が、弟書持に好意と関心を持つのは当然とは言え、花草花樹を愛し、天平十八年に若くして亡くなった弟に對して、家持は五十一句にも及ぶ長歌（17・三九五七～三九五九）を詠んで、その死を傷んでいるのである。

冒頭部歌群の特徴の第六は、旅人の居た大宰府関係の歌があるということである。それはAの、旅人の倭從等が大宰府から帰京する時の歌であり、もうひとつは間接的にはあるが、Cの、大宰府での梅花宴に追和した書持の作である。家持は少年時代に、大宰帥旅人の許で数年を過ごしており、大宰府への関心は強かった。それは、梅花宴、及び憶良の作品への追和歌を作っていることから分る。

冒頭部歌群の特徴の第七は、三香原新都即ち恭仁京を讃える歌が収められているということである。Dである。恭仁京遷都は、橘諸兄の推輓によると言われており、従って、皇親政治推進の諸兄と政治的立場を同じくし、諸兄を頼りにしていた家持にとって、恭仁の都は殊の外身近な存在であった。自らも恭仁京を讃える歌（6一〇三七）を作っている。

冒頭部歌群の特徴の第八は、山部明人の歌があるとい

うことである。Hである。家持は17・三九六九番歌前文に「幼年未_レ逕_ニ山柿之門_一」という有名な言葉を残している。山柿が誰を指すかには、まだ種々問題が残るものの、一人は山部赤人を指すという説に従うならば、家持は赤人に強い関心を寄せていた事になる。

以上巻十七冒頭部歌群に指摘出来る特徴を列挙し、家持との関連において若干説明を加えたのであるが、これによって、この歌群の歌々が、程度の差こそあれ、いずれも家持の興味・関心、家持の歌に對する価値観にマッチした歌であることを確認出来たかと思う。とするならば、この歌群の歌々は、家持の手に入るがままに機械的に集録されたものではなく、家持の精選の手を経て集録されたものである、と考えるのが適當である。

三

ではこの冒頭部歌群に収められている個々の歌が、家持の手に入ったのはいつごろなのであろうか。個々の歌に相互にさしたる統一性・関連性のみられないところからすると、その入手時期も区々であらう。従って不明というより他はない。ただ、ここで問題にしたいのは、この歌群の歌は「あらたに発見しえた資料（田辺爵氏「本傳家持の孤獨」前掲）

「十五卷本編纂次に洩れて後に発見された歌稿」（伊藤博士「万葉集

末四卷歌群の原形體（前掲）という考え方についてである。つまり両氏は、この歌群の歌は全て天平十六年以前の作であるから、当然卷一〜十六に組込めた筈なのに、そうならないのは、これらの歌群が、卷一〜十六の一応の完成（天平十六、七年）以後に、発見され家持の手に入った歌稿であったからである、と考えられるのである。

確かに、後に発見されたであろうと想像される歌（例えば、Cの歌などは、書持の死後発見されたであろう）もあるが、一方で、天平十六、七年以前に既に家持の手許にあった歌稿もあったと思われる。

例えばHはそれにあたる。それは左注に「右、年月所処、未得詳審。但随三聞之時、記載於茲。」とあることから分る。この種の注記は、卷十七以降しばしば見られる。例えば、17・三九五二番歌の題詞に「古歌一首大原高岑、年月不審。但随三聞時、記載於茲焉。」とあり、真人作左注に「右一首、伝誦僧玄勝是也。」とある。また19・四二二四番歌の左注に「右一首歌者、幸於芳野宮之時、藤原皇后御作。但年月未審詳。十月五日、河辺朝臣東人伝誦云尔。」とある。また19・四二四七番歌の左注に「右件歌者、伝誦之人越中大目高安倉人種麻呂是也。但年月次者、随三聞之時載於此焉。」とある。これらの注記の意味するところは全て、作歌年月は未審で

あるが、その歌を伝え聞いた日を規準として、ここに置くということである。つまり、作歌年月日順に歌を並べ、その歌を第一義としている編者は、作歌年月日の分らない歌に対しては、第二義的ではあるが、その歌が伝誦された日を、一応の作歌年月日として扱うという意味である。当面のHも、伝誦者こそ記されていないが、全く同主旨の注記である。従って、この注記から、Hの歌は、天平十三年四月三日（Fの作歌年月日）から天平十六年四月五日（Iの作歌年月日）までの間に、家持が伝え聞いたものであるということが分る。つまりHの歌は、天平十六年以前に既に家持の手に入っていたことが分る。もしこの歌が天平十八年以降のある時に、家持の耳に入ったものであるならば、歌日誌のその年月日の箇所へ書き込まれた筈である。Gも同様の性格の左注が付されているから、Hと同様の形で入手せられていたものと思われる。次にAの歌、少くともそのうちの17・三八九〇番歌は、天平十二年までには家持の手に入っていた筈である。それは次のようなことから言える。この歌

わが背子をあが松原よ見渡せば海人娘子ども玉藻列る見ゆ（17・三八九〇）

は、天平十二年の聖武天皇の作

妹に恋ひわれの松原見渡せば潮干の潟に鶴鳴き渡る

と類歌関係にある。この二歌の関係について、廣岡義隆氏（『吾乃松原』について『三重方言研究』1ト（一）1）は、行幸に従っていた家持が手にしていた17・三八九〇番歌を、聖武天皇が見、それに触発されて生れたのが、6・一〇三〇番歌であろう、と説いておられる。つまり天平十二年に既に家持は17・三八九〇番歌を手にしていたのである。Aのこの他の作者不明の九首も、一連のものとして纏っていたのであろうから、これらも一緒に家持の手許にあったであらう。

またBFIの家持自身の歌も、当然、後年発見されたものではなく、元々家持の手許にあったものであろう。自身の歌をうっかり忘れてしまうことはあり得ないことではないが、Fの如き堂々たる歌論を展開した題詞を持つ歌、或はBIの如き、「独」という、家持にとって重要な意味を持つ言葉为题詞に含む歌を、記録癖の強い家持が、うっかり忘失してしまうということは考え難い。殊にIの如く、天平十六年という、巻一〜十六の編纂の大詰めの時期の作を、忘れてしまう筈がない。必ずや手許にあって、しかも巻一〜十六からは意図的に外した歌である。また、FはEの歌への返歌であるところからすれば、Eも元々家持の手許にあったものであろう。

以上、A B E F G H Iなどは、天平十六、七年以前に既に家持の手許にあったものと思われるのであるが、では、それならばなぜ巻一〜十六に収められなかったのであろうか。そしてなぜ後年（天平十八年以降）採り上げられて、巻十七冒頭部へ置かれることになったのであろうか。

まずHは、巻十六以前に置くとすれば、巻八の春雑歌部であろう。しかるに巻八へ置かれなかったのは、「山部宿祢明人」とあること、即ち本当に山部赤人の作であるかどうかにか家持が不安を抱いたためであらう。それに巻八雑歌部には、赤人の歌が五首も収められており（春雑歌部では大伴坂上郎女の四首を上回って最高）、しかも篤の歌は8・一四三一番歌に既にある、作者名表記に多少不安の残るHをわざわざ取込む必要はなかったからだと思われる。

ではなぜそれが後年巻十七冒頭部歌群へ採録されることになったのか。それは、天平十九年三月三日の発言（17・三九六九番歌前文）にある如く、後年、「山柎之門」への関心の高まりによって、依然明人には不安が残るものの、あえて採録したものと思われる。

Gは、田口馬長が無名の人で、どの時代の人かも不明であったために、例えば巻八などへは組込み難かったの

であろう。それがこの歌群へ採録されたのは、家持の霍公鳥詠への、後年の異常なまでの関心（後述）によるのであるろう。

次にAはどうか。歌の内容から言って、卷三、四、六等の旅人帰京関係の歌の辺りに組込めた筈なのに、除外されたのは、Aが最初の一首を除いて、作者不明歌であったためであろう。卷三、四、六といった作者名表記卷に載せるには、余りにも作者不明歌が多過ぎたためであろう。それが後年この歌群へ採録されたのは、家持の大宰府への関心の一層の高まり―それは家持の越中赴任と関連があると思われる（後述）―によるのであろう。

では次にBFIはどうか。前節で見た如く、この三つはいずれも、家持の最高傑作と言われる19・四二九二番歌の境地へ、そしてその左注に示された歌論へと繋がっていくものをもっている歌であった。それ程の歌が、なぜ卷十六以前の巻々から外されたのであろうか。

伊藤博氏（『万葉集末四巻歌群』の原形態）^(前掲)はBIの両方に「独」の語があることに注目されて、「二つとも特殊なばあいの孤愁の歌であった」とされ、更に、特殊な場合の孤愁の歌であったからこそ、家持が心許せる弟書持に披露し、その歌稿が書持の手に渡って、どこかに紛れ込んでしまった、という風に論を展開されるわけであるが、本稿は、

特殊な場合の孤愁の歌、即ち余りにも「独」の感慨の籠った、言わば私性の歌であったからこそ、卷三、四、六、八といった公性の巻⁽⁴⁾（川口常孝氏「大伴家持と『歌日誌』」に組込むことを躊躇した、という風に考えたい。勿論家持は、卷十六以前の巻にも、例えば

山彦の相とよむまで妻恋に鹿鳴く山辺にひとりのみ
して（8・一六〇二）

のようなひとりの世界を詠み込んでいる。しかし、題詞であからさまに「独」をいう程の歌に対しては、卷十六までの巻への採録に消極的にならざるを得なかったのではないか。⁽⁵⁾

またFの場合、その題詞は、家持と同じく花草花樹を愛する（17・三九五七）、気心の知れた弟書持にあてた文章であったからこそ、多少の気負いもこめて、家持の歌に対する考え方（本音）を、何はばかりことなく述べたものであった。だが、それ故にこそ、卷十六までの巻に載せることには、まだ躊躇した（自信がなかった）のではないか。

しかるに、BFIが、後年この冒頭部歌群に採録せられたのは、卷十七〜二十が家持の（私性の）「歌日誌」であるが故に取込み易かったからである、という理由に加えて、前述AGHの場合と同様、こういった「独」の世

界こそ、また、歌を詠むことによって鬱結の緒を散らすという詠歌の境地こそ、後年の家持の文学観の確立と共に、家持がもつとも重要視するようになった世界・境地であったからなのである。天平勝宝五年二月作の19・四二九二番歌とその左注(前掲)が、そのことを象徴的に物語っているし、また、「独」、「散鬱結之緒」(と同様)の言葉が、家持の天平十八年以降の作にしばしば現れることから、そのことは頷けるのである。

BFIが巻一〜十六に採られずに、この冒頭部歌群に採られているのは、これらの歌が後年家持によってより高く評価されたことを意味しているわけで、ここに家持の歌に対する価値観の変遷をみる事が出来る。越中への赴任、弟の死、自らの罹患、政治抗争等さまざまな人生体験を通して、或は万葉集(巻一〜十六)の編纂という仕事を通して、家持は、歌による自己沈潜の世界の中に、より一層価値を見出していったのである。

なおEについては、Eの歌そのものには巻一〜十六から除外すべき理由は見当らない。恐らく、EFで一組を構成する歌であるので、Fと共に外されたのであろう。

以上本節では、この冒頭部歌群の歌の中には、巻一〜十六の(一応の)完成以前に、既に家持の手許にあったものもあつたであらうこと、そして、それにもかかわら

ずそれらの歌々が、ここに採録せられたのは、作歌年代・作者名が不明なために、或は巻々の性格上の問題のために、巻十六以前の巻々には取込めず、やむなくここに採録せられた、というような編纂上の技術的な面での理由だけではなく、家持の興味・関心、歌に対する考え方の変化、という要素も大きく関わっているであらうこと、つまり、この歌群は、家持が後年どのような歌をより重視したのかを知る上でも重要な意味を持っている、ということを述べた。

四

ではこの冒頭部歌群はいつごろ纏められたのであろうか。何度も繰返すが、この歌群の歌相互には、さしたる統一性も関連性もない。従って、纏められた時期などを考えるのは所詮無理なことかもしれない。しかしながら、第二節で見たように、この歌群の歌の採択には、家持の興味・関心、歌に対する考え方が色濃く反映されている。だから、その興味・関心等が、家持の生涯におけるどの時期に特に強く発現しているかを探るならば、この歌群の纏められた時期が、ある程度絞れるのではないか。このことについて考えるのに、ひとつの手懸りとなるのが、この歌群における霍公鳥詠の多さである。川口常

孝氏（「家持のそと」）の指摘によれば、家持の霍公鳥詠六四首のうち、越中赴任前の作は一七首、越中在任中の作は四四首、越中離任後の作は三首で、越中在任中の作が異常に多いのである。因に、越中赴任前の一七首のうち七首は、この冒頭部歌群中の歌である。この数字は、家持が越中在任中になぜか霍公鳥に異常なまでの関心を寄せていたことを示している。このことと、冒頭部歌群に霍公鳥詠が多いということは、関連があると思えてよいのではないか。つまり、越中在任中にこの冒頭部歌群を纏めたが故に、自と霍公鳥詠が多くなったのであるという予想が一応は可能である。特にGなどは、霍公鳥詠を載せんがための採録であるように思われる。

この、冒頭部歌群が家持越中在任中に纏められたであろうとの予測にとって、Aの存在は都合がよい。つまり都を離れた越中の地に身を置く家持が、かつて同様に都を遠く離れた大宰府に身を置いた父旅人のことを思いやり、その折の歌に特に関心を寄せるといふことはあり得ることであろう。特にAの十首の歌は、家郷恋しの心情が主調をなしており、しかも大宰府から任を終えて帰京する時の歌なのだから、越中において都（家郷）を思い、帰心矢の如しの家持にとって、この歌は関心措くあたわざるものであったであろう。

以上のような理由で、冒頭部歌群は越中在任中に纏められたのであろうと、極大雑把にはあるが予測するわけであるが、そういった視点から、越中在任中の家持の作品を見ていくと、冒頭部歌群とかなりよく似た素材を扱った歌群を見出すことが出来る。それは天平勝宝二年三月九日以降の作品である。今、題詞と左注（ハ）で括弧）によって示せば次のようになる。

①季春三月九日、擬_二出挙之政_一、行_二於旧江村_一、道上属_二目物花_一之詠、并興中所_レ作之歌

過_二洪谿崎_一、見_二巖上樹_一歌一首樹名都万麻（19・四一五九）

②悲_二世間無常_一歌一首并短歌（19・四一六〇）（四一六一）

③予作七夕歌一首（19・四一六三）

④慕_レ振_二勇士之名_一歌一首并短歌（19・四一六四）（四一六五）

〔右二首、追_二和山上憶良臣作歌_一〕

⑤詠_二霍公鳥并時花_一歌一首并短歌（19・四一六六）（四一六七）

〔右、廿日、雖_レ未_レ及_レ時、依_レ興預作之。〕

⑥為_二家婦贈_二在京尊母_一、所_レ詠作歌一首并短歌（19・四一六九）（四一七〇）

⑦廿四日心_二立夏四月節_一也。因_レ此廿三日之暮、忽思_二霍公鳥曉喧声_一作歌二首（19・四一七一）（四一七二）

霍公鳥曉喧声_一作歌二首（19・四一七一）（四一七二）

㊦贈三京丹比家二歌一首(19・四一七三)

㊧追三和筑紫大宰之時春苑梅歌二一首(19・四一七四)

(右一首、廿七日依レ興作之。)

㊨詠三霍公鳥二首(19・四一七五、四一七六)

㊩四月三日、贈三越前判官大伴宿祢池主霍公鳥歌、不レ

勝三感旧之意二述レ懐一首并短歌(19・四一七七、四一七

九)

㊪不レ飽下感三霍公鳥之情、述レ懐作歌一首并短歌(19四

一八〇、四一八三)

以上のような歌が並んでいるが、歌の素材、作歌態度等の面で、卷十七冒頭部歌群と共通している面が多い。

以下その共通面を挙げ、少々の説明を加えていきたい。

共通面の第一は、大宰府が意識されているということである。㊫㊬㊭とA・Cとがそれである。㊮は旅人と共に筑紫歌壇を形成した憶良の「哀三世間難レ住歌」(5・八〇四、八〇五)を意識した作であり、㊯は左注で断っているように、同じく憶良の「山上臣憶良沈痾之時歌」(6・九七八)に追和したものである。㊰は題詞にある通り、大宰府での「梅花歌」(5・八一五、八四〇)に追和したものである。

㊱は家持が出挙の用で旧江村まで行った折の作であるが、そのような折になぜ、唐突に大宰府関係の歌が詠

まれたのかについて、『萬葉集(日本古典文学全集)四』は次のように説明する。即ち、かつて筑前守の憶良が、地方巡察の余暇に「日本挽歌」等の一連の作品を詠んだのにならったのである。家持の心に、同じく天離る鄙にあって公務に携わりながら文学創作を怠らなかつた旅人や憶良を追慕する気持があったのである。また橋本達雄氏(『大伴家持の方法』和歌文)は、㊲の歌に詠まれた「つまま」の連想から父旅人を思い、そして大宰府、筑紫歌壇へと思いがふくらんでいって㊳㊴㊵が出来たとされた。更に橋本氏(『奥の麗開「家持の依興歌一首の背景」』)は、㊶について、やはり前歌㊷との関連で「興」が大宰府へと広がっていったのだと指摘された。このように、この期の家持はしきりに父のいた頃の太宰府に関心を寄せているのである。

共通面の第二は、七夕歌がよまれていることである。

㊶とBがそれである。㊸は橋本氏(『大伴家持の方法(前期)』)によれば、旅人のことを頭に置いての作である。七月七日とは程遠い、三月九日に、家持は七夕歌に心を寄せていたのである。

共通面の第三は、大宰府での梅花宴に対する追和歌があるということである。㊹とCがそれである。

共通面の第四は、追和歌があるということである。㊺

①とCがそれであり、またさきには記さなかったが、①の作から約一カ月半後の五月六日にも追和歌(19・四二一〜四二二)がある。また②③なども、憶良作に対する追和歌的な作である。家持は万葉集中六例の追和(追同)歌を詠んでいるが、そのうちの三例がこの天平勝宝二年に集中する(他の三例は天平二十年、天平勝宝七年、同八年の作であり、しかも天平勝宝二年の三例はいずれも「興に依」って作った、本格的な追和歌である)ということとは、特にこの時期に家持が追和歌に関心を懐いていたことを示している。

共通面の第五は、霍公鳥詠が多いということである。

㊦㊧㊨㊩とEFGIとがそれである。㊩以後も四月九日に「詠霍公鳥并藤花二一首并短歌」(19・四一九二〜四一九三)、つづいて「更怨霍公鳥晡晚二歌三首」(19・四一九四〜四一九六)と詠まれている。前述のように、家持の霍公鳥詠は越中在任中に異常に多いのであるが、その中でも天平勝宝二年は特に多い。川口氏(「家持の考」)の調査によれば、天平十九年七首、天平二十年六首、天平勝宝元年八首、天平勝宝二年二三首であって、天平勝宝二年は家持が霍公鳥に殊の外関心を寄せた年であったのである。ただ、天平勝宝二年になぜかくも多くの霍公鳥詠があるのか、また別に考えてみたいと思うが、㊦㊧㊨㊩

に關しては、橋本達雄氏(興の展開)は都への思いと結びついているとの指摘をしておられる。

以上五つの共通面について述べてきたのであるが、このことは、卷十七冒頭部歌群の歌々が、天平勝宝二年における家持の興味・関心、歌に対する考え方にかなりマッチした性格を有していることを意味しているわけで、表面上の類似点でもって結論を出すとの譏は免れ得ないけれども、卷十七冒頭部歌群を纏めたのは、この天平勝宝二年頃の家持(の心情)であったという臆説を提出しておきたい。

ただし、卷十七冒頭部歌群の特徴の中でも重要なもののひとつと思われる、「独」「散鬱結之緒」が、この天平勝宝二年の歌群に見られない。そのことに對する疑問に答えておきたい。結局この二要素は、家持作品・歌論のキーワードであって、天平十八、九年以降は、ある特定の時期と限定せずに広く現れるものであって(もっとも、題詞に現れる「独」は、家持帰京後の作の方が多い)、この天平勝宝二年の時点でも、当然家持の心を大きく占めていた事柄であったのである。更に言えば、Fの題詞によれば、霍公鳥を詠むことが鬱結の緒を散らすことでもあったのであるから、天平勝宝二年の夥しい霍公鳥詠は、歌を詠むことよって鬱結の緒を散らす、という家

持の歌論の無言の実践であったという風に言えなくもない。

さて、この冒頭部歌群の纏められたのは、天平勝宝二年頃であるとの推定に従うとすると、冒頭部歌群の歌の中には、その採録理由が説明し易くなるものがある。A C Dである。

大越寛文氏〔坂上大嬢の越中下向〕の指摘によれば、家持は天平勝宝元年の八月から十一月にかけて、大帳使として入京し、帰任に際しては妻坂上大嬢を越中へ伴っているのである。都の手ぶりを存分に持ち来った大嬢との日々の生活は、家持にいやが上にも都への思いをかきたたせたであろう〔伊藤博士「春愁」『萬葉集』の歌人と作品』下照50・7〕し、それはかつて同様の境遇にあった父旅人のことを思い出させ、Aの如き大宰府からの帰京の歌をすすんで採録せしめることになったのであろう。

またCの歌は、この大嬢によって家持のもとへもたらされたのではないだろうか。Cの作者書持は、天平十八年、家持が越中へ赴任して間もなく他界している。「妻をもち子をもうけることなく夭折した」〔北山茂夫氏「大伴書持の死後のこまごまとした身辺整理をしたのは大嬢であったろう。そんな折に見つかった書持の歌稿Cを、越中に持ってきたのではないか。天平勝宝二年の梅花宴追和

歌⑩などは、むしろ大嬢のもたらしたこのCに触発されて詠まれたのではないか。⑩が天平勝宝二年という、かなり唐突な時期に詠まれていることも、このような事情を考慮に入れるならば理解しやすしい。

更にDの如き恭仁京讃歌が採られていることについても、天平勝宝元年の家持の帰京を考慮に入れると理解し易い。つまり、家持は帰京中に、藤原仲麻呂が紫微中台の長官に任ぜられるという事実¹に遭遇した筈である。反藤原派の家持にとって、それは不快な出来事であったろう。そんな気持が、皇親派にとってはまだ良き時代であった恭仁京を讚美した歌を、採録せしめることになったのではないか。

以上本節では、卷十七冒頭部歌群のいくつかの特徴は、越中赴任中の、更に限定すれば天平勝宝二年の家持作品の特徴と、かなりの程度に見合っていること、それは結局天平勝宝二年頃―それは家持の作歌意欲が最も高揚した時期でもあった―この冒頭部歌群の歌が撰ばれ纏められたことによるのであろうことを述べた。結論を強引・性急に出し過ぎたことを怖れつつ、大方の御批正をお願いする次第である。

注1 天平十八年正月の肆宴歌(17・三九二一―三九二六)

の扱いは多少問題があるが、本稿では、伊藤博氏
〔万葉集末四巻歌群の原形態〕〔萬葉集の構造と成立〕下49・11の御見解に従って「歌
日誌」に含めておく。

2 伝え聞いた年月日が明記されていないのは、この頃は家持にまだ後年程の記録に対する執着心がなく、極大雑把な形でメモしてあったためであろう。或は全くの記憶だけだったかもしれない。

3 このことについての具体的な説明は、既に第二節で、伊藤、田辺両氏の御論を引いてしてある。

4 勿論私性の作品も含むが、巻一と十六は、歌日誌の「私」に対して、「公」である。詳しくは川口氏の論文によらねたい。

5 事実、巻十六以前の家持の作で、題詞に「独」と記すものは一例もない。

6 変遷と言っても、以前に全く無価値と考えていたという意味では勿論ない。より一層重視するようになった、という程の意味である。

7 ここで言ういつごろとは、最終的に万葉集の巻十七冒頭部にこの歌群が置かれた時期を言うのではなく、歌が撰ばれ、実質的にこの歌群が出来上った時期を言う。